

(別紙様式2-2)

道徳教育地域支援委託事業実施報告書（令和5年度）

1 学校の概要

- (1) 学校名 丸亀市立城辰小学校
(2) 所在地 香川県丸亀市川西町北151
(3) 学年別児童生徒数及び学級数、教員数 (令和5年4月1日現在)

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援学級	児童数計	教員
2学級 42名	2学級 37名	2学級 42名	2学級 45名	2学級 58名	2学級 60名	3学級 14名	298名	23名

2 研究主題等

(1) 研究主題

問題意識をもち、協働的に議論する子どもの育成
—納得解を追求し、道徳的価値の実現に迫る問題解決型の道徳科の授業づくり—

(2) 研究主題設定の理由

全校児童に実施した道徳アンケートでは、「道徳の授業は、あなたのためになると思うか」について肯定的な意見が93.6%あるのに対して、「道徳の勉強が役に立った経験はあるか」については肯定的な意見は73.7%に留まっている。児童を取り巻く具体的な諸問題や今日的課題に対して、従来の道徳科の授業が十分に対応できていないという課題が見える。

そこで、単に、道徳的諸価値を理解するだけでなく、現実の困難な問題に主体的に対処することのできる実効性のある力を育成していくために、道徳的問題を自分やクラスの問題として捉え、道徳的価値を実現するための課題や目標、及び道徳性を養うことよさや意義について、本音で納得するまで議論することができる道徳科の授業を目指していく。

(3) 研究内容及び方法

- ① 道徳的問題について主体的に考え、納得解を追求し、自己の生き方へつなぐ問題解決的な学習の導入
- ② 協働的な学びを生み出す発問、話し合い等の工夫
- ③ 児童の生活経験や実態、地域の実情に応じた教材の活用
- ④ 精いっぱい本音を出して話し合える学級集団に向けた環境づくり
- ⑤ 特別活動等における道徳的価値を意図した実践活動や体験活動の計画的実施

3 研究実践

(1) 道徳的問題について主体的に考え、納得解を追求し、自己の生き方へつなぐ問題解決的な学習の導入

① 道徳科の特質をふまえた授業づくり

これまででは、他の教科と同様として授業づくりを進めていたが、本年度から、道徳科の特質をふまえた授業の在り方を重点として探っていくこととした。

小学校学習指導要領解説道徳編において、明示されている道徳科の特質とは、①道徳的価値についての理解を基に、それを②自分自身との関わりにおいてとらえ（主体的）、③多面的・多角的に考える（対話的）

ことを通して、④自己の生き方についての考えを深める学習（深い学び）を行うというものである。ここに、道徳の授業のイメージが具現化され、授業の成立要件として押さえておくべき4つの要素が示されている。

道徳科の学習過程には、特に定められた形式はないとされており、一般的には「導入」「展開」「終末」の3つの場面が1単位時間の中で位置付けられている。各教科の授業づくりと同様に、授業を3つの場面に分けて、働きかけを行った。道徳的価値の理解を基に、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うための、それぞれの場面における働きかけの目的は以下に示す。

導入 ～教材と自分とをつなぐ～	○ 道徳的価値に関わる事象を自分事として受け止められるようにする
展開 ～協働的に学ぶ～	○ 道徳的価値について、多様な感じ方や考え方に接し、物事を多面的・多角的に考えられるようにする
終末 ～よりよく生きるための考えを深める～	○ これまでの自己の課題やよさを振り返り、よりよい自己の生き方を実現していこうとする思いや願いを深められるようにする

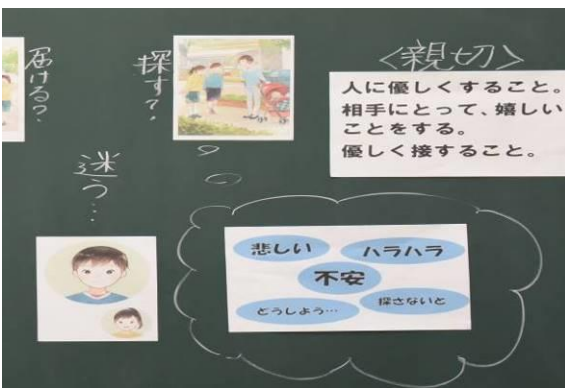
② 道徳科の授業づくりにおける具体的な取組

ア 導入における働きかけ

導入場面においては、教材の中の道徳的問題場面を自分自身の問題として受け止められるようにすることで、常に自分との関わりを意識しながら学習に向かうことができると考えた。また、自分自身の問題として捉え、その課題を解決することが自分にとって価値があると感じることができれば、学習のめあてに向かう目的意識も高まると考えた。そのために以下の点を工夫した。

【道徳科の授業づくりのポイント1】

<p>道徳的価値に関わる事象を自分事として受け止められるようにするための工夫を行う</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 道徳的問題場面とつながる生活場面を写真や図表等の視覚的な支援によって想起させる工夫 ○ 事前に読んで感じたことやアンケートの結果を示し、価値について感じたことを表出させる工夫
--



第5学年道徳科「落とし物」では、「親切」についてのアンケート結果を提示した。親切とは、周りの人や相手に優しくすることだという捉えをもとに、主人公の葛藤を自分事として考えながら、よりよい方法を探る活動につながることができた。

イ 展開における働きかけ

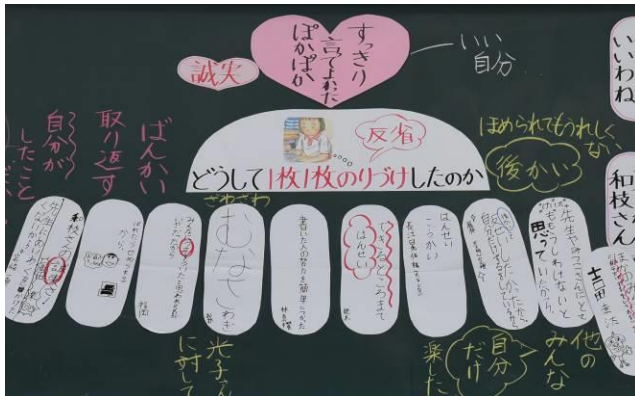
展開場面については、ただ一つの考えを正解として捉えるのではなく、多様な考えや立場の存在を当たり前のこととして捉え、自分の考えとの共通点や相違点に着目し、様々な考えや立場についての理解を深めることが大切である。そうすることで、道徳的価値を自分なりに発展させていくことへの思いや課題を培うことができる。

ただし、他教科と違い、必ずしも一単位時間内において課題解決に向かうとは限らない。また、議論する中で、子どもの様々な価値観にふれることも多い。道徳科においては、多様な立場や考えを明らかにすることで、話し合いの必要感を感じることができると考え、以下の点を工夫した。

【道徳科の授業づくりのポイント2】

道徳的価値について、多様な感じ方や考え方に接し、物事を多面的・多角的に考えられるようにするための工夫を行う

- ねらいや発達の段階に応じて、多面的・多角的に考えを深められるようにするための発問や場の工夫
- 自分の考えを選択できるようにする工夫
- ネーム磁石や ICT 等を活用し、集団内の多様な立場の存在を視覚的に捉えさせる工夫
- 自分の考えの理由と他の考えの理由を比較できるようにする工夫

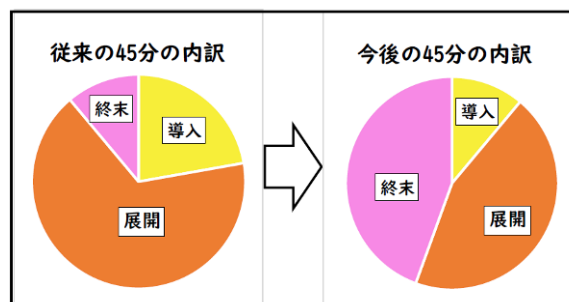


第6学年道徳科「のりづけされた詩」では、主人公の和枝が、自分のごまかしについて先生に正直に打ち明けた上に、のり付けした理由を「クラゲチャート」を用いて考えていった。子どもたちは、和枝の立場に立って考えたり、多様な考えにふれたりすることで、「誠実」についての考えを深めることができた。

ウ 終末における働きかけ

終末場面は各教科の時間での「振り返り」にあたる時間である。道徳科の目標に照らし合わせると、「自己の生き方について考えを深めることを通して道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」こととあるように、教材での学びをもとに、自己の生き方について考えを深めていく終末場面が、道徳科の一単位時間のメインとなるように学習指導過程を下図のように終末時間を長く設定した。

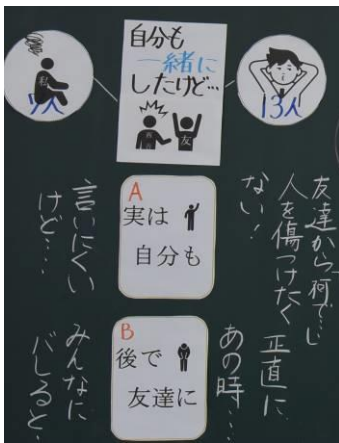
終末場面では、自己の生き方についての課題を考え、それを実現していこうとする考えを深めていった。また、対話や協働を通して、自分の考えを再考することで、道徳性を養っていくために以下の点を工夫した。



【道徳科の授業づくりのポイント3】

これまでの自己の課題やよさを振り返り、よりよい自己の生き方を実現していこうとする考えを深められるようにするための工夫を行う

- 自分との関わりの中で、考えを深めるための、発問や提示資料等の工夫
- 「これまでの自分」「これから自分が大切にしたいこと」等、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることに向かう観点を明示する工夫
- 自分のよさを実感するとともに、身近な集団の中で自分の特徴などを知り、伸ばしたい自己を深く見つめられるようにするための自己評価や相互評価の工夫



第6学年道徳科「のりづけされた詩」では、事前アンケートの中から、うそやごまかしをして後悔した具体的な場面を挙げ、これからの自分について「誠実めがね」で考えさせた。そうすることで、誠実に行動することのよさや、正しいと分かっているにもかかわらず行動することができない人間理解について考えを深めることにもつながった。

なお、振り返りの観点を示す場合、「これまでの自分」等のように、自分の経験を振り返る際に、自分のできていないことや失敗にばかり目を向ける否定的な振り返りにならないようにすることが大切である。自分のできていないことを振り返っている子どもには、正直に自分を振り返っていることを称賛したり、その失敗を生かして前向きに行動していこうと助言したりするなど、教師が直接その子どもに関わり、自分のよさを実感させ、肯定的な振り返りへ導くことを意識した。

(2) 協働的な学びを生み出す発問、話し合い等の工夫

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』で『探求的な学習や体験活動等を通じ、子ども同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要』と示されているように、「主体的・対話的で深い学び」の実現には協働的な学びが不可欠である。

そこで、協働的な学びでは、協働することのよさを子どもたちが感じられるようにすることを大切にしたい。子どもたちが感じるであろうよさとは、友達と考えを伝え合う中で、自分の考えをよりよいものに再考できることや、個々の考えを組み合わせながら新たな考えを創造できることである。そして、何より学習が楽しいと感じることである。このような、協働することのよさを十分に感じている子どもたちは、授業以外の様々な場面においても自分の考えをよりよくするために、子どもが進んで他者と協働していくような主体的な学習者へと育っていくと考えた。

授業場面においては、他者に考えを伝えたい、他者の考えを聞きたいと思える工夫が必要である。自分の考えを一つの正解として捉えるのではなく、同じ問題に対しても多様な考えや、その考えの理由があることに気付かせることが大切である。そうすることで、自分と違う考えやその理由を進んで伝え合うようになると考えた。

これまでの本校の実践では、様々な協働的な学びの成果が見られた反面、いくつかの課題が出てきた。中でも、子どもたちの活動を充実させればさせるほど、45分間では授業が収まらないことが大きな問題となっていた。この問題は、どの研究授業においても顕著だった。

そこで、本年度は、45分間で協働的な学びを完結させられる方法を教員間で話し合い、授業における「3つの精選」を次のように考え実践している。

授業における「3つの精選」

- 手を挙げて発表する場面の精選
- 書く機会の精選
- 教師の話す時間の精選

これら3点の活動自体を否定しているのではないが、これまでの研究授業を省察的に振り返った際、教師が必要以上にこれらの活動に執着していることが見出された。協働的な学びを充実させる時間を確保するために、「3つの精選」に取り組むことにした。

③ 児童の生活経験や実態、地域の実情に応じた教材の活用

本校は、校区内に隣保館や人権啓発センターがあり、地域と連携しながら人権・同和教育の推進を図っている。そこで、地域の実情に応じた教材の活用として、以下のように取り組んでいる。

- 総合的な学習の時間等における体験活動と、道徳科の指導内容及び時期を年間指導計画に関連付けることで、具体的な見通しをもつことができるようにする。
- 保護者や隣保館の職員などの地域の方々をゲストティーチャーとして招く機会を設ける。

【総合的な学習の時間等における体験活動を通じた道徳教育】

全ての学年で体験活動を通じた地域との交流学习を設定している。地域の方々の生き方や思いに触れ、そこで学んだことをもとに自身の行動を考えることで、共生社会の実現に向けた具体的な行動をイメージすることができる。特に体験後の振り返りを重視し、クラスの中で似たような課題はないか、それを解決するための具体的な取組として何ができるかについて考える場面を保障している。また、教職員も学校では見られない児童の強みや成長を垣間見ることができ、人権・同和教育だけでなく、道徳教育をはじめとした様々な指導へとつなぐこともできている。

○ 校区内にある施設や組織

- ・金山文化センター ・金山児童館 ・人権啓発センター ・川西コミュニティセンター
- ・ネムの木（高齢者福祉施設） ・b & g まるがめ（放課後児童クラブ）
- ・川西町自主防災会 ・長寿会 ・フジグラン（スーパーマーケット）



3学年では、フジグランを訪問し、「仕事」をテーマとして総合的な学習の時間を進めている。身の周りで働く人から社会を支える役割に気付き、そのやりがいだけでなく、困難なことやその時の解決方法を学ぶ。そして、それを学級の係活動に活かしていく。



6学年では、「防災」をテーマとして、川西町自主防災会の協力のもと総合的な学習の時間を進めている。防災訓練（避難所設営）を通して、全ての人の人権が守られる避難所を考えていく活動を行い、さらにそれを、全ての人の人権が守られる「学校づくり」へとつなげていく。

【ふるさと教材等を活用した保護者とともに議論する親子道徳】

2学期の授業参観では、ふるさとである香川県や香川県の偉人、身近な出来事などを題材に全学年で道徳科の授業を行った。その中で、子どもと大人と一緒に考える活動を設定した。大人の考えを聞くことで、様々な見方・考え方が身に付くと考えた。また、児童がふるさとや身近な出来事について考える姿を保護者に見てもらうことで、家庭への啓発にもなった。



1年 「いいものいっぱい かがわ たいせつにしたい まるがめ」
自分たちのふるさとを大切にするために丸亀のゆるキャラづくりに挑戦した。その場所や物のすばらしさを絵にこめて、友達や家族で考えた。
2年 「丸亀城」
家族から丸亀のおすすめスポットを教えてもらった。どうして、その場所をおすすめしたいのか家族のふるさとへの思いに触れることができた。
3年 「丸亀うちわを守り伝える」
自分の住んでいる周辺の素晴らしいお店や人を紹介するために、友達や家族と話し合った。どんなお店や人が出てくるか興味深く学んだ。
4年 「心のバリアフリー」
さまざまな場面のカードから、誰が、どんなことに困ってしまうか想像し、もし同じようなことが起こったら、どんな行動ができるか友達や家族と話し合った。
5年 「小学生香川県知事になろう」
小学生県知事になり、ふるさとのすばらしさを伝えるために、どのような内容を、どのような方法でPRすればいいのか親子で考えた。
6年 「井上 通女」
公平な社会を実現するために、どうすればいいか親子で話し合った。みんなが笑顔になるには、立場が違う人みんなが納得できる話し合いの必要性を学んだ。

(4) 精いっぱい本音を出して話し合える学級集団に向けた環境づくり

道徳科の授業では、自分の内面を語り合うことで、自己の生き方について考えを深めることにつながる。だからこそ、安心して自分の正直な思いや経験を語り合える雰囲気大切にしたい。そのための取組として以下のことを行った。

○ 気持ち日記

日々の生活を見つめ、そのときの気持ちを言葉に置きかえ、日記に綴る。日記をもとにした交流を通じて、一人ひとりの感じ方や考え方の違いを表出させ、それらを肯定的に受け止められるようにする。より深く考えさせたい内容については、教師が意図的により詳しく綴らせることで、自分に向き合うことができるようにする。

○ 多様な発表方法

多様な感じ方や考え方に接することができるように、挙手して指名することを少なくし、子どものつぶやきを拾ったり、筆談などを認めたりすることに重きを置いた。

(5) 特別活動等における道徳的価値を意図した実践活動や体験活動の計画的実施

本年度、児童の生活や生き方につなげる実践活動や体験活動の充実を図った。児童の自他を大切にする生活や生き方につなげるためには、様々な人とのかかわる体験が大切であると考えた。そのためには、児童と児童、家庭、地域間の豊かな関係を構築していく必要がある。例えば、低学年時には、周りの人から大切にされた経験や、周りの人を大切にできる自分の姿への気付きにより、自分も周りの人も大切であるという意識を体験的に養っていく。そして、中学年時以降、少しずつ周りの人権課題に触れ、他者のために頑張ったり、協力したりする経験を積み重ねながら、人を大切にするということについて考えを深めたり、自分の生活に広げたりできるように指導している。そうすることで、本校の目指す子ども像である「周りの人のことを考える子」に迫っている。

① 子どもと子どもをつなぐ実践活動・体験活動

(実践事例)

- ・あいさつ運動
- ・紹介しよう全校のきらりパッピーさん
- ・集団登下校
- ・すてきでショー
- ・お願い！七夕ラジオ
- ・全校遊び（縦割り）

「紹介しよう全校のきらりパッピーさん」とは、友だちの良いところを見つけ、カードに書くという活動である。カードは廊下に掲示し、特に価値づけしたい児童の姿は放送で全校で紹介した。友だちの頑張りを認め合う場を設定することで、自己有用感の向上と周りの人のことを考える行動の具体を知ることができる。実際、「トイレのスリッパを並べていた」という紹介を行うと、後日トイレのスリッパに関する事例が増えた。

「すてきでショー」とは、自分の好きなことや得意なことを中心に自分のよさを発表する場である。学校生活の中に自分が認められる場をより多く設定することで、自分を肯定的に捉えることができ、自己肯定感の高まりにつながると考えられる。

② 子どもと生活をつなぐ実践活動・体験活動

本校の児童会目標は、『笑顔きらきら 毎日ハッピー』である。この目標を達成するための大きな枠組みとして「なかよしプロジェクト」を年3回実施している。「なかよしプロジェクト」とは、どう行動すれば児童会のめざす学校になるのかを、児童一人ひとりが人権尊重の視点から考えていく全校活動である。その中で、いじめを無くす方法やなかまづくりの活動等を行っている。本年度は、「自己開示」とそれを受け止める「キャッチャー」をテーマに進めている。

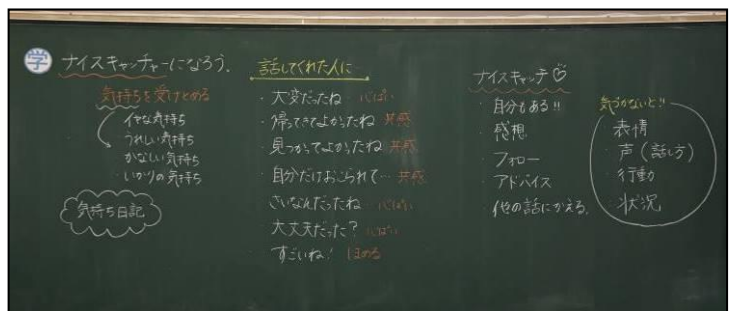
○ 1学期 「いろんなきもち」

自分の中にある様々な気持ちを知り、それを正しく言葉にできれば友達とのトラブルも回避することができることを伝え、日常に起こり得る題材を使って全校に課題を提示した。その後、学級で発達段階に合わせて、様々な気持ちを探したり、1週間の自分の気持ちを表現したりする指導を行った。



○ 2学期 「ナイスキャッチャーになろう」

友達の不安や悩みを受け止める側の行動について、アクティビティを通して考える活動を計画した。自分の失敗や過ち、大人に叱られた経験などを話し合い、それをフォローアップする活動を通して、どのような行動や言葉が、相手に共感したり、相手を励ましたりするものなのかを理解することを目指した。



(6) 校内研究授業の公開と講師招聘

本年度、これまでの研究の過程や成果を県内に発表するとともに、今後の方向性について幅広く意見を得るため、10月と11月に校内研究授業を県内教員等に公開した。その際、指導者として、元大阪教育大学教授である園田雅春氏を招き、指導助言をいただいた。

① 1年西組公開授業 「はしの上のおおかみ」



○ 参観者からの主な意見

導 入	<ul style="list-style-type: none"> 生活と教材をつなぐために、ハンカチが落ちている写真を提示したり、資料を扱う時間を短くしたりする工夫が効果的だった。 クラスの気になる場面の写真をとっておくことが重要だと感じる。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> 役割演技の際、演技を深く掘り下げると、さらに多様な意見が出たのではないかと。 教室に一本橋を再現することで、相手のことをより深く考えることができていた。 役割演技をしたときに、どんな思いでその行動をしたのか、してもらってどう感じたか等、子どもの言葉で発表させたかった。
終 末	<ul style="list-style-type: none"> 子どもが生活に生かそうとできるような教師の声掛けが印象的だった。 「橋の上にいるら…」では、自分の事として考えることは難しい。
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> 時間配分が参考になった。 教科書は使うべきである。教科書の中に価値に迫れるヒントがたくさんあると思う。 「実生活に生かす」について、体験的に学んだあとの深め方を自分もいろんな手法で試してみたい。

○ 園田雅春氏からの指導助言

<ul style="list-style-type: none"> 子どもの意見を教師が全て引き受けるのではなく、「どう思う？」と子どもに返していくことが必要である。そのために、ためを作り、すぐ返さず子どもに考えさせていく。 素材にたっぷり入り込むことで、子どもの琴線に触れることができる。 持続可能な「親切、思いやり」の追求をしてほしい。本時では「ハッピー」がキーワードだった。しかし、「ハッピー」は、限定的である。happen（起きる）とbeing（～な状態）に違いがある。持続可能な状態である「ウェルビーイング」を目指す子どもを育ててほしい。 道徳の学びが生活の中ですぐさま現れるとは限らない。行動は熟するまでに時間がかかる。根気良く指導を行い、次どう生かされるのか、リアリティと座学の往還が重要である。
--



第1学年西組道徳科学習指導案

学習指導者 大西 直希

1 主題名 「しんせつにすると気持ちがいい～『はしの上のおおかみ』～」（親切、思いやり）

2 本時の主張点

本主題における「親切、思いやり」とは、身近にいる人に温かい心で接し、親切にすることである。指導に当たっては、まず教材と自分をつなぐために、事前にクラスの実態を写真にとっておき、授業の始めに提示する。また、場面ごとにおおかみの行動の変化に対する考えを自由に発表し合うことで、多様な考え方や価値観があることを捉えられるようにし、「親切」についての理解を深められるようにしたい。そして、授業の終末では、自分が橋の上で友だちと出会ったらどうするかについて考え、考えた方法を自分たちの日々の生活の中で活用できるように一般化することで、子どもたちが日々の生活で実践できるようにしたい。

3 本時の学習指導

(1) 目標

親切にされたあとの、登場人物の行動の変化について考えることを通して、親切な行動の良さに気づき、自らの生活に親切な行動を取り入れようとする態度を養う。

(2) 学習指導過程

※**目**…目的意識、**協**…協働的な学び、**生**…自己のよりよい生き方につなぐことについての工夫点

学習活動	子どもの学びの過程 発 発問	教師の指導・支援と評価
1 はしの上のおおかみのペープサートを通して、学習課題を確認する。	<ul style="list-style-type: none"> • おおかみがうさぎを追い返したよ。 • クラスでも集まるときに、友だちを押ししたり、配布物を取り合ったりしているよ。 <p>どうしたらみんながハッピーになれるかな。</p> <p>発 おおかみはどう思う。</p>	<p>目 課題を自分事として捉えるために、クラスの写真をとっておき、授業の始めに提示する。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 読み聞かせの途中で児童に声かけを行い、児童がおおかみの行動の変化について考えられるようにする。 • 児童が話の内容を確認できるように、黒板にペープサートや挿絵を掲示する。
2 はしの上のおおかみのペープサートを見る。	<ul style="list-style-type: none"> • うさぎを通してあげると思う。 <p>発 おおかみが優しく親切になったのはどうしてかな。</p>	
3 おおかみの行動の変化から親切について考える。	<ul style="list-style-type: none"> • くまさんに親切にされると嬉しかったから自分もしたんだよ。 <p>やさしくされると、ハッピーになれる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 役割演技をする際、「道を譲る」などの行動面だけでなく、どんな風に譲るのかまで考えることで、児童が相手のことをより深く考えられるようにする。
4 実生活の中で具体的場をあげ、優しくする方法を考え、演技する。	<p>発 もしも自分が橋の上で友だちと出会ったらどうするかな。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 道をゆずってあげるよ。 • 細くなってすれ違うよ。 <p>発 ふだんの生活で、どうしたらハッピーになれるかな。</p>	<p>協 ハッピーになれる方法を考える際、自分にできるかどうか友だちと吟味させるために、選択肢を提示する。</p> <p>協 役割演技を見て、それがハッピーかどうかを他者評価するための視点を提示する。</p>
5 本時のふりかえりをする。	<ul style="list-style-type: none"> • 相手がハッピーになれる方法を考えるよ。 • 相手がハッピーになると自分もハッピーになれるよ。 <p>• みんながハッピーになれるように、優しくしてあげたいな。</p>	<p>評 親切について、多面的・多角的に考え、誰もがよりハッピーに生活するために、自分ができようことを考え、それを実践しようとしているか。（発言・カード）</p> <p>生 児童の振り返りを助けるために、学校生活の中の具体的場面を設定する。</p>

② 2年東組公開授業 「およげないりすさん」



○ 参観者からの主な意見

導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の理解が早く、りすさんがいないのは、相手のことを考えていないからだという思いが出ていた。 ・自分の普段の行動を明らかにしておくよかった。
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ交流から全体への流れが多面的・多角的な学びにつながったと思う。その反面、自分たちにつなげるところに時間がなかった。 ・まさにみんなが納得解を見つけていたところがすごいと思った。
終 末	<ul style="list-style-type: none"> ・本学級でりすのような気持ちになっている子はいないかと、女兒のリレーでの辛かった体験からちゃんと考えていたと思う。 ・みんなが楽しく過ごすためにどうすればよいか考える際も、グループで話し合うと更に多様な考えを引き出せると思った。
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ・発問と話し合いに注力するといったところが学校内で共有できているのがよいと思った。 ・生き生きと学びに向かう子どもたちの姿に感激した。 ・ワークシートを使わず授業を進めていることに驚いた。だからこそつぶやきがあると思った。

○ 園田雅春氏からの指導助言

- ・先生と子どもの息があっており、安心しきっている子どもたちの姿があった。
- ・児童のつぶやき一つ一つがお宝である。そのつぶやきを焦点化して授業の流れをつくっていききたい。その際は挙手をして指名することも大切。だが、制限にならないようにしたい。
- ・本教材は、スムーズな展開でハッピーエンドである。その中で、子どもの社会へ通ずる泥臭い教材研究が必要である。
- ・素材に基づき、その作品世界を十分に理解・共有し、素材を滑走路として、現実世界へ飛び立っていくことで、自分たちの日々の暮らしを見つめていくことを大切にしてほしい。
- ・ダメと言われても次の日に再びやってくるリスの強さについても学んでほしい。
- ・リレーの時、つらかった思いを話した児童に対して、みんなが考えたウェルビーイングを「みんなの話を聞いてどう？」と問い返すことで、さらに深まりを得ることができるだろう。
- ・一人の児童に焦点化することでリアルな世界で仲間と通じて学ぶことができる。
- ・今後として、児童にとって入口、出口が違う授業を目指してほしい。



第2学年東組道徳科学習指導案

学習指導者 福岡 佳克

1 主題名 「だれとでもいっしょに～『およげないりすさん』～」（公正・公平・社会正義）

2 本時の主張点

本主題の内容項目は、自分の好き嫌いにとらわれずに誰とでも、公正・公平に接する心情を育てることをねらいとしている。クラスの実態として、自分とは異なる（苦手なことがある）友だちに対して、強く当たることがある。そこで、身近にいる友達と一緒に仲よく活動することのよさや楽しさ、助け合うことの大切さを実感できるようにすることが重要である。導入時に事前アンケートの結果を提示し、友達との関わりについて自分の経験を想起させたり、友達の体験を聞いたりする活動を行うことで、友達と仲よくすることについて問題意識をもてるようにする。また、考えを交流させるためのグループ学習を行ったり、子どもの発言に対する問い返しを工夫したりすることで、友達について多様な考えや価値観があることに気付かせたい。

3 本時の学習指導

(1) 目標

りすさんの立場を考えながら、かめさんのとった行動を考えることを通して、相手の気持ちや立場を考えたり、誰に対しても公平に接したりすることが大切であることに気づき、誰とでも仲良くしようとする態度を育てる。

(2) 学習指導過程

※目…目的意識、協…協働的な学び、生…自己のよりよい生き方につなぐことについての工夫点

学習活動	子どもの学びの過程	発問	教師の指導・支援と評価
1 教師の経験を話し、問題提示をする。	先生の対応がよくなかったんじゃないかな。相手がかわいそうだよ。		目教師の実体験を話し、どうしたらよい人間関係を築くことができるのか、問題提示をする。
	友だちといいかんけいをつづけるためには、どうすればいいのかな。		
2 教材の前半を読んで、登場人物について考える。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 発 どうしてかめさんたちはたのしくなかったのだろう？ </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;"> りすさんがこなかったからじゃないかな。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;"> かめさんたちが泳げないことを理由に、りすさんを断ったからだ。 </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px; margin-top: 5px;"> 自分たちのせいだ。自分たちが泳げないことを理由に断ったからだ。 </div>		<ul style="list-style-type: none"> ・りすさんが泳げないことが悪いのではないことをおさえる。 ・りすさんが泳げないからではなく、かめさんの対応でお互いに楽しむことができなかったことをおさえる。 ・自分たちの方法でみんなが楽しく過ごせることができることに気付かせ、その方法をみんなで考える。
3 かめさんたちの納得解を考える。	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"> 発 かめさんの「いい考えがある」ってどんな考えだと思う？ </div>		協 なぜそのように考えたのかや、そうすることでどうなると思うかと問うことで、公平な考えのよさの根拠を話せるようにする。
(1) 友達と	島に行かずにみんなで遊ぼうって言うよ。背中に乗せてあげて、りすさんを島に連れていってあげるよ。みんなでりすさんの船を作ってあげるよ。		
(2) みんなで	友だちといいかんけいをつづけるには、お互いの気持ちを考えること、みんなが納得できる方法を考えることが大切だね。		・よりよい方法を見つけ出すために、いい関係になれそうかみんなに問い返す。
4 教師の経験について話し合う。	～したら、〇〇になって、いい関係になれるんじゃないかな。		生 振り返りの話型を設けることで、自分の生活を具体的に振り返ることができるようにする。
5 今までの自分やこれからの自分について考える。	今までの私は、苦手な友だちに強く言ってしまったことがあったけど、これからは友だちの気持ちを考えて行動しようと思います。		評 生活を振り返り、公平な考えに基づいた行動をしようとしている。 (発言・ワークシート)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 全校児童に実施した道徳アンケートの「道徳の授業は、あなたのためになると思うか」について肯定的な意見はR4年度とほぼ変わらないが、「道徳の勉強が役に立った経験はあるか」について肯定的な意見はR4年度73.7%に対してR5年度は77.1%と上昇している。
- 今年度に行ったアンケートによると、「人が嫌なことをされているのを見たことがある」という児童が、61%であり、その中で、「その時に何か行動できた」児童は70%であった。学校全体において、人が傷ついていることに気付き、さらに行動することができた児童は、43%となり、昨年度よりも5%の改善が見られた。本校の目指す子ども像である「周りの人のことを考える子」が定着してきていることがうかがえる。
- 道徳科の実践では、道徳的価値に関わる事象を自分事として受け止められるようにするために、アンケート調査の結果を、導入時の目的意識をもつ場面や、終末の自分の生き方とつなぐ場面で効果的に提示したことで、子どもたちは、目的意識をもって学びに向かい、意欲的に自分事として生き方についての考えを深めようとする姿が見られた。
- 展開場面では、多様な感じ方や考え方に接することができるような発問や問い返しを吟味し、子どもたちに投げかけたことで、多様な視点や立場を通して道徳的価値について考える様子が見られた。
- 園田雅春氏を指導者として、校内研究授業に招聘することで、教材の進め方や価値への迫り方、発問など新たな視点で研究を見つめなおすことができた。今回の指導助言を通して、共通認識のもと、その後の日々の授業実践を積み重ねていこうとしている。

(2) 今後の課題

- 終末場面においては、道徳科の一単位時間のメインとなるように学習指導過程を設定してきたが、展開場面での活動に時間を多く要していることで、満足いく活動時間が確保できていないことも多い。展開場面においては、価値に迫るための活動を精選したり、考えが深まるような発問を吟味したりすることに加え、意見や立場の異同が一目で分かるような思考ツールやICT機器の活用についても研究を進めていきたい。併せて、授業における「3つの精選」についても積極的に進めていきたい。
- 終末場面においては、振り返りの観点を示してきたが、教師が観点を明示しなくても、子ども自身が本時の学びを自分のよりよい生き方と効果的につなげるような振り返りができるように、助言や支援をしていきたい。
- 協働的な学びの充実に向け、ヒントを得るため、「自己実現に向かうための資質・能力」育むことを目指している岐阜大学教育学部附属小中学校の研究会に参加した。教師は、授業の中でどのような児童の姿を目指すのか、児童が資質・能力を発揮しているときの内面を描き出すことで、教師が児童の姿を見届ける際の視点が明確になる。児童の発言や反応に対して、どのように問い返し、揺さぶりをかけ、問いを深めるのか、参考になるところが大いにあった。「自己実現に向かうための資質・能力を発揮している姿と、その内面に働く子どもの状態の描き出し」について、その理念や手法を校内で共有し、今後の取組に生かしていきたいと考えている。